

# 特集 第13回 まちづくり賞

## まちづくり奨励賞

青森県黒石市

三世代で続けるまちづくり

—黒石「こみせ通り」の保存と創造的継承—

青森県建築士会南黒支部 미래のまちづくり委員会



## まちづくり奨励賞

新潟県新潟市秋葉区

パッチワークプロジェクト

株式会社パッチワーク AKIHA

(秋葉区まちづくり協議会)

## まちづくり優秀賞

島根県松江市白潟地区

松江白潟エリア賑わい具体化構想

まちのお手本

まつえ白潟賑わい協議会



## まちづくり奨励賞

佐賀県鹿島市

「肥前浜宿」まちなみ保存を

活かしたまちづくり

NPO法人肥前まちづくりデザイン研究会

## まちづくり大賞

東京都町田市

玉川学園地区に於ける近隣&

地域マネジメント活動

NPO法人玉川学園地区まちづくりの会



## まちづくり優秀賞

大阪府東大阪市石切・日下地域

地域のひろばをつなぐ Common Loop

一般社団法人 baamu lab.



## まちづくり奨励賞

佐賀県佐賀市

お堀で地域をつなぐ水鏡プロジェクト

水鏡プロジェクト実行委員会



## まちづくり優秀賞

大分県宇佐市・日出町

空の特攻、海の特攻、支部広域連合による戦争遺構のまちづくり

大分県建築士会宇佐支部、別府支部(日出町含む)



# 総評

佐藤 滋 | まちづくり賞選考委員会 委員長 / 早稲田大学 名誉教授

毎回、まちづくり賞の審査を通じて、全国各地から寄せられる取り組みを拝見し、その多様性と進化に深い感銘を受けている。なかでも今回は、地元の建築士が明確なリーダーシップを発揮し、市民とともに創造的で新しいまちづくりを推進している姿が数多く見られ、特に印象的であった。

それらの活動はいずれも、地域が本来備えている魅力や潜在力、あるいは「その地域らしさ」を中核に据え、その発見から表現、さらには深化へとつなげるプロセスを通じて、地域社会へ確実に還元されている。今回、まちづくり大賞および優秀賞に選ばれた事例には、こうした職能としての自覚のもとで共感の輪を広げ、建築という専門領域を起点に、まちの造景へと戦略的に結び付け、それを地域に対して明快に提示しようとする意図が一貫して感じ取られた。

こうした多様性と深化が進む一方で、近年強く感じているのは、積極的な意味での「まちづくりの定式のひとつ」が次第に見え始め、その中で建築士の役割と位置づけが明確になってきたという点である。「まちづくり」という言葉が社会に定着してから、すでに半世紀以上が経過した。その起源は、住民による抵抗運動から行政主導の施策まで、実に多様である。そうした流れの中で、建築士がいかにまちづくりに関わるべきかについても、長い時間をかけて多様な模索が重ねられてきた。

近年のまちづくり賞の審査を通じて改めて実感するのは、そうした蓄積を踏まえ、建築士が自らの職能を中心に据えつつ、拡張された専門性を十分に発揮し、堂々とまちづくりをリードする存在として確立されつつあるという事実である。

大賞および優秀賞については、それぞれの評価点に関して他の審査員と概ね意見が一致しており、ここでは重ねて述べることは控えたい。

一方、奨励賞にとどまったものの、「三世代で続けるまちづくり 一黒石『こみせ通り』の保存と創造的継承」の発表は、強い印象を残した。黒石のこみせ通りは、これまでも数多くの賞に選ばれてきた、いわばまちづくりの著名な事例である。今回の応募は、そうした成果の背後に、親子三代にわたり地域で活動を継続し、その「遺伝子」を建築士として受け継ぎ、広げてきた営みがあったことを、改めて提示したいという意図に基づくものであった。

地域で活動する建築士は、ときに「縁の下の力持ち」であってよい。しかし同時に、こうした取り組みが建築士の活動として広く認知され、「まちづくりのリーダーとしての建築士」という姿を社会に示していくことの重要性を、私自身あらためて強く認識させられた。成果は決して当事者だけの努力によるものではなく、地域社会全体の支えがあってこそ実現したものであり、そうした人々を巻き込みながら活動の輪を広げていく点にこそ、地域に根ざして活動する建築士ならではの役割がある。

なお、黒石のこみせ通りの取り組みについては、私自身が大学の研究室に在籍していた約50年前に、ささやかな問題提起を行ったことが一つの契機になっていると、後日、発表者から聞かされた。外部の人間が投げかけた提案を、地域が真摯に受け止め、長い時間をかけて育て上げてきた成果であることに、あらためて驚かされると同時に、こうした営みこそが、この半世紀のまちづくりの歴史の中で、各地に芽吹いてきたのだという思いを新たにした。

それぞれのまちには、まだ気づかれていない多くの「種」が埋め込まれている。それらを再発見し、まちづくりとして組み立てていくことが、建築士によるまちづくりの重要な原動力であり続けるであろう。

募集開始!

## 2025年度 第13回 公益社団法人 日本建築士会連合会 まちづくり賞の募集

**応募期間** 2025年4月1日(火)~6月30日(月)

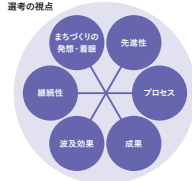
**賞の趣旨**  
 (公社)日本建築士会連合会では、より身近になった市民まちづくりのなかで、建築士や建築士会としての専門性いかんなく発揮し、みごとにその役割を果たしてきた活動を支援するとともに、他団体、地域との連携を強化した地域まちづくりのさらなる発展に資するため、優れたまちづくり活動等の実績を評価・表彰します。今年で第13回目を迎えるまちづくり賞への多くの活動事例の応募を期待します。

**選考対象**  
 地域における継続的なすぐれた  
**住まい・まちづくり活動の実績あるもの**

**例え**

① 建築物・環境調査、 保全・再生	⑦ 景観まちづくり
② 地域活性化	⑧ 防災まちづくり
③ 教育・人づくり	⑨ 復興まちづくり
④ リノベーション	⑩ 歴史まちづくり
⑤ まちづくり的な住まいづくり	⑪ 街中(空き家)まちづくり
	⑫ 福祉まちづくり
	⑬ 木のまちづくり等

**選考の視点**



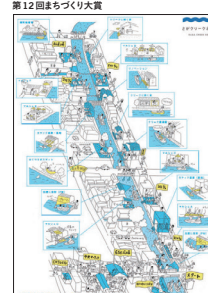
**応募資格**  
 ■ 建築士個人、  
 または、その建築士が参加しているまちづくり活動団体  
 ■ 建築士会または会員が推薦する個人、あるいは団体

**選考・表彰**  
 一次選考 ■ 応募事例から概ね7点程度をまちづくり賞及び大賞候補として選考する。  
 最終選考 ■ まちづくり賞の大賞候補者には、全国大会前日の2025年9月18日にプレゼンテーションをして頂き、公開審査を行い、まちづくり大賞(1点20万円)、まちづくり優秀賞(2点各10万円)およびまちづくり奨励賞(4点程度)を決定する。全国大会「おおさか大会」式典の中で表彰する。

**応募方法**  
 応募要項・応募用紙等は、日本建築士会連合会のホームページからダウンロードしてください。  
<http://www.kenchikushikai.or.jp>

**提出先**  
 (公社)日本建築士会連合会 地域活動部「まちづくり賞」係  
 〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館5階  
 e-mail [chiiki@kenchikushikai.or.jp](mailto:chiiki@kenchikushikai.or.jp)

**第12回まちづくり大賞**



受賞のアーケードを活かしたまちづくり

# 第13回まちづくり賞の選考経過報告

高梨 良行 | 日本建築士会連合会まちづくり委員会 副委員長 / 山形県建築士会 常務理事

第67回全国大会大阪大会に合わせて、「第13回 建築士会連合会 まちづくり賞」の選考会並びに発表会が、大会前日の令和7年9月18日にグランキューブ大阪で行われました。

今回の全国大会は、「建築からソーシャルデザインへ」というテーマを掲げての開催、また周囲は関西万博一色の中、あちらこちらで、ミyakミyakの歓迎を受けての開催で、前回とは少し違った雰囲気の盛り上がりを感じられました。

先ず、予備選考会ですが、全国各地から、17団体の応募があり、テーマ、課題の取り上げ方もそれぞれで、地域を見据えた特徴のあるものでした。

令和7年7月10日開催の予備選考会は、提出された応募書類をあらかじめ、審査いただき、連合会本部に於いて予備選考会を経ての選抜となっており、7団体が本選へと選ぶ規定でしたが、合計点数の差が4~10位のところで拮抗しており、非常に難しい選考となりました。結果、各評点をベースに、最終検討を重ねたところ、7点提出のところ、8点本選考会へ上申することで一致いたしました。

本選のまちづくり賞の選考委員は、委員長に佐藤滋氏、委員には、高田光雄氏、後藤治氏、北野哲也氏、清水耕一郎氏の5名の先生方ですが、ご多用の中、全委員が対面での審査に臨まれました。

本選当日は、発表順をくじ引きで決め、そこから各プレゼンを行い、各々選考委員の先生方からの質問に答えていく、最後にすべての発表が終わった段階で、再度質問を受けてから選考審査に入る形式でした。選考審査中の議論も活発なものとなり、持ち点での投票で決することから、集計作業も緊張する場面でした。委員の方々も言われたように、どれも甲乙つけがたく、難しい選考であったとのことでした。そこで今回は例外措置として、まちづくり大賞1点、優秀賞2点のところ、3点に変更し、無事第13回まちづくり賞は決定し、翌日の全国大会大阪大会にて見事表彰授与となりました。受賞者の皆様におかれましては、誠にありがとうございます。これからも、各県、各地域に於いてご活躍をお祈り申し上げます。

## 選考委員講評

### まちづくり賞の講評

後藤 治 | 工学院大学 総合研究所 教授

全国各地から意欲に溢れたまちづくりの活動を応募いただき、まずは篤く御礼申し上げます。また、地域のまちづくりに貢献する各地の建築士の活動にエールをおくりたい。

最終選考に残った8件は、いずれも地域に根差した特徴ある活動で、どれを大賞、優秀賞にするか、選考にたいへん苦勞した。それゆえ、大賞、優秀賞に選ばれたものと選ばれなかったものの差は、ごくわずかだったと思う。そうしたなかで、各賞に選ばれた活動の評価すべき点を、私なりにまとめると下記の通りである。

大賞に選ばれた玉川学園の活動は、取り組みの期間も長く、活動の内容も多岐にわたっていた。その点において、他の提案よりも、一日の長があった。また、長い期間の活動にもかかわらず、マンネリに陥らず、今日的な新たな課題にも取り組もうとしている点にも好感が

持てた。

優秀賞のうち、大分の活動は、地域各地に残る第2次世界大戦に関わる「戦争遺産」をまちづくりに取り込もうという内容である。避けて通りがちな「戦争遺産」に正面から取り組んでいる点と、個別の「戦争遺跡」でなく広域の「戦争遺跡」を対象としている点に、意欲とユニークさが感じられる内容で、まだ始めたばかりの活動だが、今後の発展が大いに楽しみな内容であった。

その他の優秀賞の東大阪と松江の活動は、地域にある空き家や空き店舗を資産にかえて地域の元気につなげるもので、オーソドックスに評価できる内容であった。また、若い建築士が取り組んでいることに好感が持てた。両活動とも、始めた取り組みが起動に乗り始めたところだが、本賞を契機にさらに取り組みが加速することを期待したい。

以上、本年の各賞は、図らずも長期、開始期、初期終了時と活動の時間が異なるものが選考された。異なる期間の活動を同一のテーブルにのせて審査することの難しさを考えると、将来的には活動の時間やタイミングによって部門を分けることがあってもよいかもしれないと感じた次第である。

## まちづくり賞選考での再認識

北野 哲也 | 大阪府建築士会 理事

はじめて選考審査に参加させて頂きました。大阪士会では、毎年、地域貢献活動事業助成制度により、まちづくり活動を行う団体に対して審査の上で助成を行っています。また、私自身は長年、行政職員としてまちづくりに携わってきました。まちづくりは1つの専門性だけでなく、様々な分野の方々の関わりが必要です。その中でも地域に根差した継続的な活動となるためには特に地域住民の主体性が最も重要と考えています。そこで、まちづくり賞の選考の視点とあわせてこれらの考えを念頭に選考に臨みました。

まちづくり賞の候補となった8つの活動は、夫々の地域性を背景に切口も様々で本当に精力的な活動でした。選考は、発表をお聞きした上で最大3つの活動に投票しなければならず悩みました。そこで、1つ目として「玉川学園地区における近隣&地域マネジメント活動」の

建築士の枠を超え暮らしの課題解決を様々な専門家と一緒に幅広くそして深く取り組まれている活動に、2つ目として「空の特攻、海の特攻、支部広域連合による戦争遺構のまちづくり」の戦争の歴史遺構の模型製作から平和教育に向けた新たな地域まちづくりに繋げる活動に、3つ目として「地域のひろばをつなぐCommon Loop」の建築士の職能を活かしながらも学生の若い力も活用し継続的に取り組まれている活動に投票させて頂きました。

残りの5つの活動も含め8つの活動は、建築士がその推進力となっていることに建築士、建築士会メンバーとして大変うれしく思うとともに、地域住民からも頼りになる存在とあらためて再認識しました。今後も夫々の活動のさらなる発展を期待するとともに、私自身、機会を作り、是非、訪れてみたいと思います。

最後に、建築士の職能には限界もあるかもしれませんが、まちづくり活動に対する建築士の活動はさらに広がるものと思っています。大阪士会では、まちづくり活動に対する助成も引き続き行うとともに、全国の様々な切口でのまちづくり活動を参考に、まちづくり賞の候補となる活動、団体が出てくることを期待しています。

## 第13回まちづくり賞の選考を終えて

高田 光雄 | 京都美術工芸大学 教授 / 京都大学 名誉教授  
日本建築士会連合会 理事 / 京都府建築士会 顧問

「まちづくり賞」の講評にあたって、毎回、「選考の困難性」を指摘してきたが、今回も最終選考に残った8団体の活動は、そもそも単純な比較が困難である上、いずれも本賞の評価基準である「まちづくりの発想・着想」「先進性」「プロセス」「成果」「波及効果」「継続性」「総合性」の観点から高く評価できるものであり、選考に困難を極めたことは言うまでもないことであった。まずは、優れたプレゼンテーションを行なっていた8団体、さらには、多数のまちづくり賞への応募団体に心からの敬意を表したい。その上で、私が特に気になったいくつかの活動に対する感想を記しておきたい。

大賞を受賞された「玉川学園地区における近隣&地域マネジメント活動」は、長期にわたる継続的活動で、改訂が重ねられてきた建築協約に始まり4つのプロジェクトの推進、さらに、コロナ禍を乗り越えて、新世代を含めて今日的課題に挑戦されている姿は、多くの後継

団体にも示唆に富んだ迫力を感じた。

優秀賞を受賞された「空の特攻、海の特攻、支部広域連合による戦争遺構のまちづくり」は、極めて重い課題に対して、地元での議論の積み上げを基礎とするまちづくり活動を通じて外部への働きかけや連携を行う点が評価された。戦争遺構の保全活動を誇りとする平和への取り組みの継承、発展を望みたい。

同じく優秀賞を受賞された「松江白濁エリア賑わい具体化構想まちのお手本」は、空き家問題を背景としながらも、強いインパクトというより優しい街並みの色や光に着目した地道な景観まちづくり活動で、関係者の連携を進めようとする若い力の存在をひしひしと感じた。活動の定着、発展を強く期待したい。

同じく優秀賞を受賞された「地域のひろばをつなぐCommon Loop」は、商店街空き店舗や文化住宅の空き家などを再生しながら、生活文化の継承、発展を含めてネットワーク化していく活動で、建築士、地域住民、大学学生などの若い力の有効な連携が読み取れた。さらなる活動の推進と展開を期待したい。

この他、奨励賞を受賞された4つの活動も上記の活動に勝るとも劣らない内容で、活動を推進されてきた建築士や専門家、地元住民のみならず、学生等の支援者などの功績を高く評価したい。

# 大賞の総合力、優秀賞の個性を評価

清水 耕一郎 | 日本建築士会連合会まちづくり委員会 委員長

第13回まちづくり賞において第1次審査を通過して、最終選考の対象となった8つのまちづくり事例は、いずれも優れた特徴や魅力を備えていて、まちづくり賞にふさわしい活動でした。

大賞となったNPO法人玉川学園地区まちづくりの会による「玉川学園地区に於ける近隣&地域マネジメント活動」は、2005年からまちづくり市民団体として活動を開始されており、2025年で20周年を迎えていました。当初は、まちづくりの課題や魅力を共有するためのまち歩きやワークショップが重ねられ、まちづくり憲章・デザインガイド等をまとめ、地区の建築協約を制定し、それらにもとづく具体プロジェクトにおける検討に取り組みされました。その後、社会状況や要請の変化に対応して、さくらと緑の保全・更新をはかる活動が始められ、空き家の活用・運営事業、空き家防止・住まい継承の学習・啓発などに取り組みられ、高齢化対応策として、循環型乗り合い交通サービスやオンデマンド型型院送迎サービス等を研究・実施してきています。関連団体や専門家、行政との連携をはかりながらその時々々の要請に応えるまちづくり活動は、住宅地としての地区の魅力を長期にわたって維持・継続していくことを確実に推進するものであり、高く評価しました。

優秀賞となった3点の内、まつえ白濁賑わい協議会による「松江白濁エリアの賑わい具体化構想-まちのお手本」は、2023年に発足

した協議会による賑わい創出のための具体化構想5ヶ年計画を作成し、それにもとづく活動が開始されました。協議会の構成メンバーは、全員まちなかでの事業主であり、いわゆるプレイヤーであります。月1回の定期会合をはじめとして、何かあればすぐ集まり、行動するチームの行動力によってわずか2年半で計画事業の8割が実施・着手されるにいたっています。こうしたスピード感と、まちのアイデンティティを共有し、各事業の道しるべになるべくカラーコードの作成活動をぶれないまちづくり活動を支えるものとして高く評価しました。

大分建築士会宇佐支部・別府支部による「空の特攻、海の特攻-支部広域連合による戦争遺構のまちづくり」は、第2次世界大戦の戦争遺構がなくなりかけている中で、これを、平和を希求する歴史遺構として研究・整備する、地味だが消す訳にはいかないこうした活動を地域の建築士会、それも2支部合同で取り組むことにより持続可能なまちづくりとなることを目指したところが、戦後80年を迎える本年のまちづくり優秀賞にふさわしいと評価しました。

一般社団法人baamu lab.による「地域のひろばをつなぐ Common Loop」は、地域の空き家・空き地をそこの所有者・管理者の理解のもと、共用 (common) 利用化し、それらをつなげて地域が元気になるよう活用・運営する仕組みを提案・実施するまちづくり活動で、空き家が地域資源としての価値があると建築士が評価するところから始まり、オーナーとの調整をはかったり、自らがプレイヤーとなったり、新たなプレイヤーを見つけたりする活動にいたるまで、積極的に取り組んでいるところを評価しました。

## 2025年度 第13回まちづくり賞 応募作品一覧

賞	まちづくり事例の名称	まちづくり活動団体名	活動地域
大賞	玉川学園地区に於ける近隣&地域マネジメント活動	NPO法人玉川学園地区まちづくりの会	東京
優秀賞	松江白濁エリア賑わい具体化構想まちのお手本	まつえ白濁賑わい協議会	島根
	空の特攻、海の特攻、支部広域連合による戦争遺構のまちづくり	大分県建築士会 宇佐支部・別府支部(日出町含む)	大分
	地域のひろばをつなぐ Common Loop	一般社団法人 baamu lab.	大阪
奨励賞	お堀で地域をつなぐ水鏡プロジェクト	水鏡プロジェクト実行委員会	佐賀
	パッチワークプロジェクト	まちづくり会社 株式会社パッチワークAKIHA(秋葉区まちづくり協議会)	新潟
	「肥前浜宿」まちなみ保存を活かしたまちづくり	NPO法人 肥前まちづくりデザイン研究会	佐賀
	三世代で続けるまちづくり-黒石「こみせ通り」の保存と創造的継承-	一般社団法人 青森県建築士会 南黒支部みらいのまちづくり委員会	青森
	ダンボールハウス ワークショップ	(一社)岩手県建築士会 女性委員会一級建築士事務所 studio ktm	岩手
	浸水被害対応と防災まちづくり	秋田県建築士会 浸水被害対応チーム	秋田
	古民家再生「恩返しプロジェクト」	つるのこまちづくり古民家再生プロジェクト株式会社 高橋木工所	山形
	地域みんなで実現した会津柳津駅舎の再生	会津柳津駅利用活用検討会議+ミライツナガル会議+株式会社TIT	福島
	草津温泉再興計画	北山孝二郎+K計画事務所	群馬
	商店街の[景]を変える。建築士と地元系インフルエンサー、マルシェキュレーターが仕掛けるまちづくり	おさんぽまーけっと @菅野とまり木	千葉
	江坂ひととき	江坂ひととき	大阪
	貸したい人と借りたい人の想いをつなぐ「恋文不動産」	一般社団法人 奈良県建築士会 生駒支部	奈良
	高瀬地区地域活動	なし	熊本

# まちづくり大賞

事業名 玉川学園地区に於ける近隣&地域マネジメント活動  
— 坂と階段の緑豊かな郊外住宅地で住み続けられるために —

受賞団体 NPO法人玉川学園地区まちづくりの会 | 活動地域 東京都町田市

木村 真理子 | NPO法人玉川学園地区まちづくりの会 代表理事 / 一級建築士事務所 主宰 / 東京建築士会



## 玉川学園について

玉川学園は、1929年（昭和4年）に学校法人玉川学園の創設者である小原國芳氏が、氏の理想とする「教育ムラ」をつくらうと開発した手づくりの学園まちです。地元の農家から買い上げた入会地のうち、約3分の1を玉川学園の学校用地とし、残り3分の2を「高原の学園都市」と称して主に小原氏の賛同者を対象に土地分譲を行いました。1区画は約500坪が標準規模だったそうです。

終戦時には僅か80世帯程のまちでしたが、戦後（特に1960年代から70年代に）急発展し、今では小田急線玉川学園駅を中心とする半径1.5km約220ヘクタールのエリアに約10,000世帯2万人が暮らす住宅地となっています。

玉川学園のまちの特徴は、谷戸と尾根からなる起伏に富んだ地形が崩れずに開発されたおかげで、変化のあるダイナミックな景観が楽しめることです。開発当時の低い玉石の擁壁と法面、緩いカーブの道、道路境界に植えられた樹齢を重ねた桜などからは、小原氏のまちづくりの思想が偲ばれます。

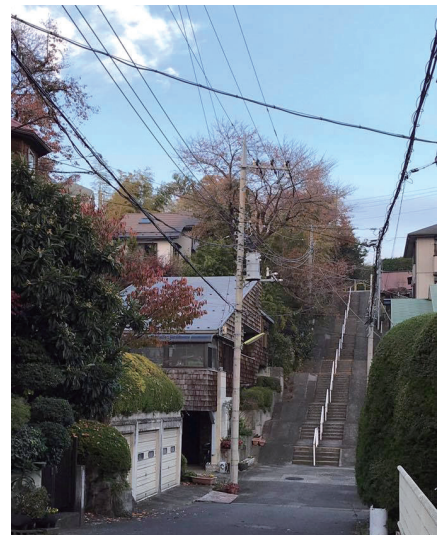
また、広い斜面の敷地が代替わりなどで五月雨的に分割されたこともあり、急坂と階段、長い路地状敷地が多いことや、ヒダの細かい丘陵地に張り付くように住宅が広がっていること、高低差により視界が遠くまで伸びて緑豊かに感じられることも大きな特徴です。

## まちづくりの会の設立と活動概要

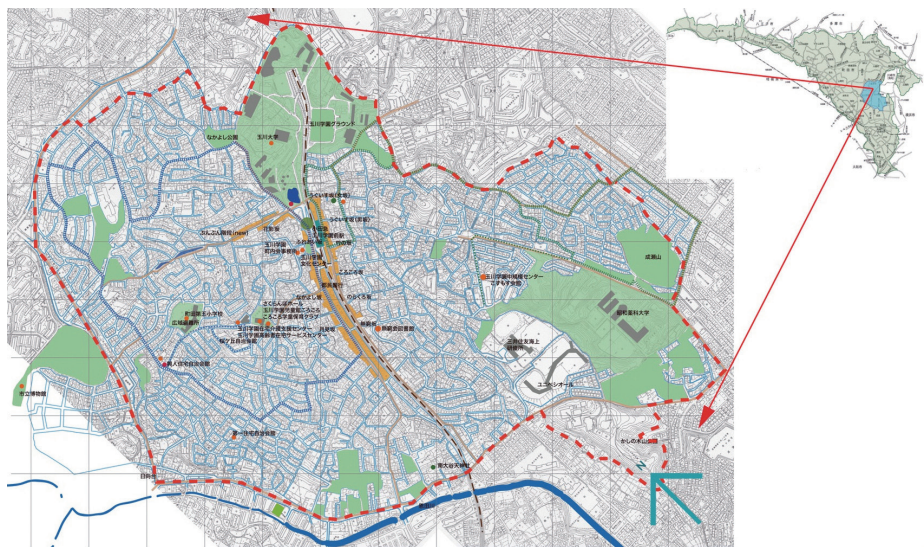
1990年代以降、宅地の細分化や大規模敷地跡地の大型マンション建設などが目立つようになり、高い擁壁の造成や緑の伐採など眼に余る開発がまちの景観を乱し出しました。

そこで、2004年暮れ、まちには「開発ルールと意識共有が必要」との思いから有志が住民に呼びかけ、2005年に「町田市住みよい街づくり条例」に基づく「街づくり市民団体」として、玉川学園地区まちづくりの会（以下まちづくりの会）が立ち上がり、活動を開始しました。

以降、建築家や都市計画家などの専門家が黒子になって、住民と一緒に地域の在



上) 坂と階段のまちの特徴的な風景写真  
中) 活動エリア図  
下) まちづくり憲章、方針、住みよいまちと暮らしのデザインガイドの冊子の写真



り方を考え話し合い、まち歩きやワークショップを重ねました。そして、「まちづくり憲章」「まちづくり方針」「住みよいまちと暮らしのデザインガイド(住宅地版)」にまとめて地域に提案しました。

2011年、それらの一部と玉川学園町内会による「工事の申し合わせ事項」を合わせたものが「建築協約」として玉川学園町内会・自治会連合会により制定され、以来ずっと、玉川学園町内会に協力する形で問題のある宅地開発などの「地域協議」に対応して来ています。

## まちづくりの会の活動の広がり

ただ、近年では、紳士協定である「建築協約」の限界や大きな開発は減って開発し尽くされた感もあります。代わって、商店街の空洞化や活気の減少、緑の減少、住民の高齢化による空き家や空き家予備軍の増加、独居や孤立、孤独などの課題が目立つようになってきました。

人口減少下&経済停滞下においても魅力的で住み続けられるまちであるためには、福祉や文化教育、防災分野なども連携して多方面に重層的に地域を捉え維持することや既にあるものを資源として活かしていくことがかかせません。

そこで、新たな視点での地域マネジメントとして、2018年から、社会環境の変化に対応した多角的な視点から地域の住環境を捉えて地域をデザインする地域資源活性化活動を始めました。

また、2019年には、緑の維持管理&啓発活動が町田市から子ども広場の整備委託を受けることになりました。

それらをきっかけに、手足を動かしアイデアを出す人が主体的に活動できるよう、より多様な人が活動に関わることができるよう、会の活動を独立採算のプロジェクト制活動にしました。これによって急速に結果がついてくるようになりました。

さらに、2021年には、会をNPO法人化し、活動への信頼と活動の継続を目指しました。

## 地域資源活性化プロジェクト

地域資源活性化プロジェクトは、今のままでは持て余していたり使われていない建物や場所やモノやコトについて、「今までとは視点を変えた新たな価値や魅力として存在

させられないか」「新たな地域資源として再構築できないか」を模索し、解決につながる手段をおもしろく企てようと立ち上げた活動です。

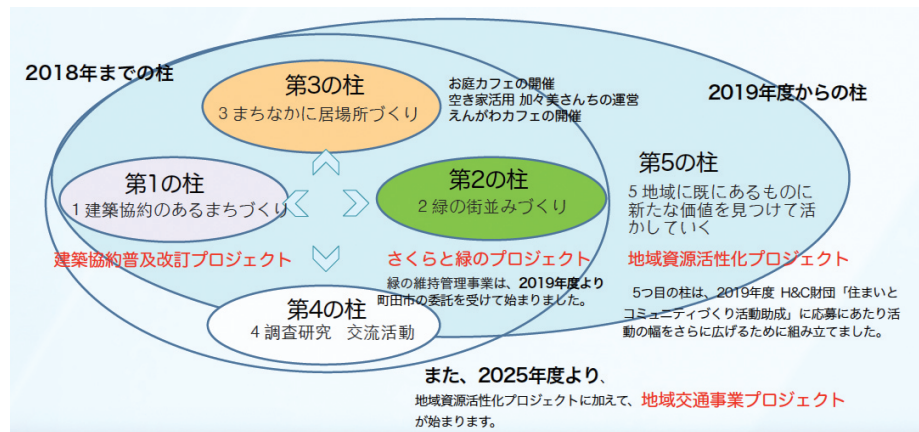
また、小さな活動を組み合わせ、多様な団体と協働連携していくことで、大きな仕組みを考えずとも大きな課題の実現に近づけることを目指してもいます。

玉川学園も郊外住宅地のご多聞に漏れず、空き家や空き家予備軍の存在が目につくようになってきました。2019年、ハウジングアンドコミュニティ財団の助成をいただき、空き家の実態調査、無理解な事業者に渡さない仕組み、空き家にしない啓発などを目的としたチラシや新聞(まちかどとつきどつき通信)の作成配布、空き家空きスペースの有効活

用、相談、住み替え支援といった活動や、道路に面した緑と交流の小さな場(みちコモン)の点在普及を目指す活動の実践を始めました。

「まちかどとつきどつき通信」1号では、人生100年時代をどう過ごすかのヒントや覚悟、空き家予備軍段階での準備の重要性や先進事例、行政の相談窓口、既成概念に捉われない知識などを記事にし、町内会の回覧板や市役所、市の出張所、地域の学校や医院、お店などにも置いてもらい周知に努めました。

通信では、まちのあるべき姿をテーマに地域資源を見直し活かす視点で街並みやコミュニティ、地域交通などを取り上げ、ほぼ年1回のペースで、現在8号まで発行してきています。



会の活動の構成のダイアグラム

このまちは、人が手でつくられてきたまちです。緑の「みちコモン」をつくって、おしゃべりの機会をまちのおちこちで。

主催: 玉川学園地区まちづくりの会・地域資源活性化Project

「まちの魅力維持」×「空き家の発生予防・適正管理・利活用(伊藤)」

住まいの今後・空き家・空き室・お庭活用など「住民教室」イメージ

主催: 玉川学園地区まちづくりの会・地域資源活性化Project

このまちは、人が手でつくられてきたまちです。空き家・空き室活用でまちに活気を。楽しく暮らしやすいまちに。

主催: 玉川学園地区まちづくりの会・地域資源活性化Project

玉川学園地区まちづくりの会 一版と階段、みどりのあるまち暮らし

地域資源活性化プロジェクト

主催: 玉川学園地区まちづくりの会・地域資源活性化Project

チラシいろいろ





「みちコモン」まち歩き写真

て街並みを崩さない売り方を相談されました。会の有志で検討の結果、敷地分割せず緑や地形を活かし近隣に配慮した建て方をするなら多少の値引きに応じる、当初は地元の不動産屋さんや関係者ネットワークで売り出す、という方針で物件のアピールポイントと売買趣旨書を作成し広報しました。なんと購入者は大学の建築の先生でした。その上、シェアハウスのような公民館+図書館のような地域に住み開いた家ができて上がり、今では此処もまちの大事なコミュニティー拠点のひとつです。

さらに、2021年頃から地域の主要団体の責任者同士の信頼関係が増してきました。

今後は公共交通の減便の加速が懸念されることや益々の高齢化や独居化により公共交通を補う地域内の小さな移動手段が必要となると考え、2022年秋から玉川学園町内会、玉川学園地区社協、玉川学園地区まちづくりの会の代表者などが地域交通のあり方を一緒に勉強し、地域でできることを模索する検討会（地域交通を考える会）を立ち上げました。

そして、2023年6月より地元のデイサービス施設の送迎空き時間の車を使った巡回型乗り合いサービス「さくら号」運行を開始しました。さらに、「さくら号」の次の移動支援として、会の四つめのプロジェクト「地域交通プロジェクト」を新たに立ち上げました。再びハウジングアンドコミュニティ財団から助成をいただき、自家用車を使ったオンデマンド型の病院限定の付き添い移動支援「まちかど号」の本格運行を2026年度より予定して準備しています。

懸案であった大学連携も実現し、超高齢社会のまちづくりが専門の先生による玉川学



まちの縁側1丁目の加々美さんち開設準備お掃除&ペンキ塗ワークショップ写真

園をフィールドにした授業や地域の今までを踏まえた上でのこれから必要とされる地域資源分析、ケアプラン分析による上手に老いるための地域資源のあり方検討などの連携研究も進んでいます。

## 総力戦のまちづくり

嬉しいことは、会で始めた活動がいつの間にか他団体の活動へとつながり、活動も人も混ざり合っどこの会のどの活動かがわからなくなる程に広がってきたことです。

また、いわゆる既成活動の枠にはまらない面白い活動している個人やグループ（家の前におすすめ本を並べて、本棚がある所ならどこで借り返すのもOKという「きんじょの本棚」や家の庭先や加々美さんちなどで自作の品や食材などを売り交流を楽しむ様々なマルシェなど）が現れ、日常的にまちを楽しく使いこなそうという機運も広がってきています。

今後は、地域の活動団体やインフルエンサーとなりそうな活動的な住民との連携も進む中で、地域ビジョンの共有に加え、効果的な協働の仕方や役割分担を整えていき、多方面から地域課題の山を登る「重層的なまちづくり」、互いの得意と興味特徴を活かして連携&協働する「総力戦のまちづくり」を目指したいと思っています。



持ってけ堂ぶらぶらまち歩きイベント写真

### きむら・まりこ

1954年名古屋生まれ。町田市玉川学園に在住40年。一級建築士事務所主宰。

会での活動では、建築や都市づくり関係者が多く在籍する専門性を活かし、地域の成り立ちや地形、歴史文化の魅力を活かした「住み続けられるまち」を提案し、家の建て方住み方暮らし方、世代交代のし方、地域資源の活用、移動支援、地域活性化イベントなどを地域の主要団体や多様なグループと連携協働して進めている

#### 玉川学園地区まちづくりの会

<https://www.facebook.com/tamagakumachiplan/>

#### 玉川学園地区まちづくりの会

#### 地域資源活性化プロジェクト

<https://tamagawagakuenra.blogspot.com>

<https://www.facebook.com/tamagawagakuen.LRA>

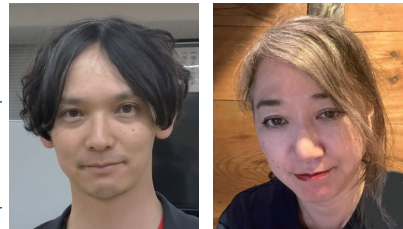
# まちづくり優秀賞

事業名 **松江白潟エリア賑わい具体化構想**  
 — 「ひと・まち・彩りハンドブック」作成の実践 —

受賞団体 **まつえ白潟賑わい協議会** | 活動地域 **島根県松江市白潟地区**

**北脇 祥大** | (有)北脇建築設計事務所 専務取締役、島根県建築士会 まちづくり委員長

**坪倉 菜水** | コクーン設計舎 代表、(株)天神 Products 代表取締役、加茂福酒造株式会社 取締役、島根県建築士会 会長



## 松江市及びエリアの概要

島根県松江市は人口約二十万人、宍道湖・中海・日本海に面し、「水の都 松江」と呼ばれている。市域は宍道湖と中海を結ぶ大橋川によって南北に分かれ、水辺とともに形成されてきた都市である。活動の拠点としている白潟エリアは、松江城築城以前から大橋川の水運によって発展した商人の町を中心に、居住エリアや水辺エリアなどで構成され、松江の原点とも言える地区である。昭和四十年代には、松江駅から川の北側、松江城周辺まで商店街が連続し、市民の日常を支えていたが、物流手段や消費者ニーズの変化により衰退し、現在は中心市街地のドーナツ化、空き家の増加、担い手不足といった課題が顕在化している。

## 賑わい協議会の設立と構想の作成

こうした状況を背景に、2023年、白潟エリアでは複数の商店街、まちづくり会社、建築士、事業者等が連携し、エリア全体の賑わい創出を目的として「まつえ白潟賑わい協議会」を設立した。それぞれが個別に活動していたまちのプレイヤーを集めることから始まり、2023年の設立以降、毎月定例会を開催し、立場や分野を越えて集まり続けている。協議会の特徴は、単発のイベントや事業を積み重ねるのではなく、「集まり続けること」そのものを活動の基盤としている点にある。顔の見える関係性を維持しながら、日常的な対話を重ねることで、まちに対する課題意識や将来像を共有する場を形成してきた。

設立初年度に協議会で最初に取り組んだのがこの先5年間、まちで実現したいことを自由に描いた「まつえ白潟エリア賑わい具体化構想」だ。様々な立場でまちに関わる協議会のメンバーが、これから自分が取り組むこと、こんなものがまちにあって欲しいと思うもの、まちの中で変えたい部分を思いのままに描いた構想は、妄想地図と呼ばれ、まちで起こる出来事をすべて「我がこと」として捉え、関係し合うための共通の土台となっている。イベント、ハード、ソフト、パブリックの4項目に分類された空き家・空き地活用、イベント、景観形成、企業誘致、拠点づくり、人の関係性の構築など、30を超える妄想は、現在までに約8割が何らかの形で実行されており、自分たち自身がその結果に驚くほどで、妄想地図は完成形を示す計画図ではなく、関係者



図1 ハンドブック表紙

松江市  
白潟エリア

ひと 手  
まち ハンド  
彩り プック  
本

●●●●●

March 2025

同士が関係し合うための循環を生むツールになっていると感じている。予想外の進捗スピードに現在地域住民との連携を強め、新たな構想の作成に着手している。

このエリアでは空き家や改修などの建築分野だけを建築士が担うのではなく、建築士自身もまちの一員として、イベント設営や社会実験といった実作業に関わっている。結果として空き家相談などにも迅速に対応できる関係性が築かれている。

賑わい具体化構想の策定以降、白濁エリアでは空き家を活用した新規出店が継続的に生まれている。飲食店やゲストハウス、物販、複合的な拠点など、業種や規模はさまざまであるが、点在するかたちでまちに新たな活動の場が増えてきた。

これらの出店は、具体化構想で描かれた将来像や方向性が共有されたことで、「このまちで何かを始めてよい」という心理的なハードルが下がったことも一因であると考えている。まちの目指す姿や価値観が言語化・可視化されたことで、出店希望者と地域との対話が生まれやすくなり、結果として新たな動きにつながっている。

こうした新規出店の増加は、単発的な賑わいではなく、日常的な人の往来や関係性の積み重ねを生み出しており、賑わい具体化構想が町の変化を後押しする「下地」として機能していることを示している。

## 建築士が主となる取り組み

「賑わい具体化構想」の中で、建築士の視点から提案した主な取り組みが、白濁エリアのカラーコードづくり、天神川ライトアップ、公共空間における「人溜まり」緑地モックアップである。いずれも建築単体を対象としたものではなく、まち全体の雰囲気や居心地を少しずつ更新していくことを意図した試みである。

これまで景観を考える際には、行政が策定するガイドラインや規制が中心となることが多かった。もちろん、それらはまちを守るために重要な仕組みである。一方で、私たちの暮らしの中には、夕暮れに照らされる路地、季節ごとに手入れされた店先の花、古い建物と看板の組み合わせなど、制度では捉えきれない「好きな風景」や「いいな」と感じる瞬間が存在している。こうした日常の感覚に根ざした景観の価値観を掘り起こし、住民や事業者自身が共有することが必要ではないかと考えた。

### Project.1 カラーコードへの取組

カラーコードの調査・作成は2024年にチームを立ち上げ、定期的な住民・専門家ワークショップを通じて進めてきた。住民、商店街で商う人、大学生、外国籍の人など多様な立場の参加者が集まり、まちの好きなところ

だけでなく、不安や課題についても意見を交わした。いきなり色彩の話題に入るのではなく、生活の中で無意識に感じている色や灯りがもたらす印象について語り合うことで、このまちの「色」の文化へと視点を導いていった。1月にはプロの写真家による撮影ワークショップを行い、撮影という行為を通じてまちの色を発見する機会となった。

専門的な調査と実測は、色彩の専門家と建築士を中心に2泊3日のワーキンググループを行い、舗装や外壁、看板などの測色とともに、なぜその色が使われてきたのかという背景のヒアリングを実施した。白濁地区をそれぞれの立地や特性に応じた六つのゾーンに分け、それぞれのエリアで抽出された色の特徴を整理している。調査の結果、街を構成する色やヒアリングで語られた色は全体として淡い色調が多く、住民からは「松江らしい」という感想が聞かれた。宍道湖に浮かぶ夕日のグラデーションや、雨が多く刻一刻と移り変わる松江の空模様、柔らかな色彩の和菓子、濃茶と薄茶を日常で楽しみ暮らし方、のように、松江の環境と人の感性が色に表れていると感じられた。その反面、舗装の色などは雑多な部分があり、景観に即したもの、というよりその時々で使いやすいものを使ったであろうことが推測された。石の色などもそうで、地元の石というより、その時に手に入りやすいもので構成されていると感じた。



図2 カラーコードワークショップ



図3 カラーコードワーキンググループ

これらのバラつきをどのように捉え、整理していくのかは今後の課題である。

## Project.2 天神川ライトアップ

天神川ライトアップでは、天神橋の欄干と河川敷を対象に、ソーラー式の仄かな灯りを用いた社会実験を行った。過度な明るさではなく「やさしい灯り」を意識した演出としたことで、「風情がある」「懐かしい雰囲気が心地いい」「夜も安心して歩ける」「川のあ風景が引き立つ」といった好意的な声が多く寄せられた。灯りが通行の安全性を高めるだけでなく、夜のまちの印象や回遊性に影響を与えることが確認できた。河川敷に併せて道路の一部も使用し、ベンチの設置等も行い、良い感想が多かった。川沿いの道路の溜りに人が集うようになり、地域の商店街主催で白壁に町の古い8mm映像を映して鑑賞するなど、イベントも行われた。道路占用や河川占用を積極的に活用し、住民だけでなく道路や河川の管理者の協力を得ると共に、成果を共有し、一時的なイベントではなく、恒久的な灯りの設置を目指して情報

を共有している。活動は2年目のモックアップ（河川敷へのテラスの設置）を終え、2026年度に向けて3年目の計画が進行中である。

## Project.3 緑地モックアップ

公共空間の緑地モックアップでは、まちに人が立ち寄りたくなる「人溜まり」をつくることを目的に、角地や歴史的建造物などまちのアイコンとなる建物の店舗前などに小さな緑地を複数箇所設置した。「街の景観がやさしくなった」「通りに彩りが生まれた」「立ち止まる人やベンチに座って休む人が増えた」といった声があり、緑がまちの居心地や人の行動に与える効果を実感する結果となった。また、緑地と灯りの相性が良いことも改めて確認された。

## ひと・まち・彩りハンドブックの作成

これらの取り組みの成果をまとめたものが、2025年3月に第1版をまとめた「松江白濁エリア ひと・まち・彩りハンドブック（通称：まちのお手本）」である。

このハンドブックは、白濁地区に暮らす住

民や事業者である「私たち」が、受け継がれてきた文化や歴史的背景、地域特性や四季折々の景観を踏まえ、住みよく美しいまちと賑わいが両立する将来像を共有するための資料である。白濁エリアの将来を、地形や空の広さ、水辺や町割りを活かすこと、生業や歴史が紡いできた文化を資源として継承すること等を目標に、目指すべき景観の整理を行った。白濁エリアにも様々な町内があり、水辺があり、路地があり、歴史がある。町並みや地域別の建築物の特徴、敷地利用について分析を行い、より良く住まうための配慮事項を整理している。町ごとにそれぞれの時代性と色彩の特徴があり、ベースとなる色も街頭やベンチなどのストリートファニチャーの色も、店舗のテントや看板の色も様々で、それぞれの町の特徴を持っていた。まずはそれを再認識し、共有することでこの地域に住むこと、事業を営むことへの誇りを醸成し、「自律的・継続的に成長するまち」の考え方を共有することを目的としている。

冊子はただ景観を整理する資料として作成するのではなく、工芸家や仏具屋、お茶屋や日本画家など、様々な立場の方から松江



図4 天神川ライトアップ



図5 天神川ライトアップ

の色彩に関する寄稿もいただき、住民の方が読んで楽しく、手にして誇らしく思えるような構成を心掛けている。

## まちのお手本のこれから

本ハンドブックは完成形を示すものではなく、今後も更新されていく「まちのお手本」である。住民の目線から始まる景観づくりを通して、住民、事業者、専門家が同じテーブルで対話し、「このまちらしさとは何か」を育てていくための第一歩と位置づけている。建築士は設計者として前に立つのではなく、地域に寄り添い、ともに考え、ともに実践する伴走者として関わっている。

## カラーコードの5年間のロードマップ

### 1年目(2024年度)

#### 色彩の整理・方向性の決定

- ・町の色彩を抽出、測色データの収集。
- ・エリアごとに特徴的な色や景観を整理し、初期的な「色の地図」を作成。

### 2年目(2025年度)

#### 合意形成の基盤づくり・小規模な

#### 実証実験

- ・歴史的特徴・町のストーリーの掘り起こし。
- ・町同士の関わり合いと「目指すべき色彩像」の検討。
- ・住民ワークショップを通じた合意形成の仕組みづくり。
- ・灯りの演出実験を昨年より充実させ、回遊

性の向上を検証。

- ・ハンディのある人への色彩・サイン計画に着手。
- ・実物の塗装見本を町に置き、実験的に評価。

### 3年目(2026年度)

#### 合意形成の基盤づくり・実証実験

- ・町ごとの色彩ボードの作成。
- ・合成写真による「色彩の見える化」
- ・歴史的背景と未来を見据えた素材・仕上げの検討。
- ・取りまとめ(第一次的色彩方針集)を完成。

### 【4~5年目:中期目標フェーズ】

#### 合意形成と周知を重視する

- ・住民との合意形成を深める段階
- ・各町での色彩案を共有し、意見交換や公開レビューを実施。
- ・「色彩ガイドライン(強制力のない推奨ルール)」の素案を作成。
- ・灯り・緑・サイン計画を含めた総合的景観デザインレビューの仕組みを試行。
- ・プロトタイプ実装
- ・実際の外壁塗替えや緑化、商店街サインにおける実証実験を展開。
- ・小規模な合意形成による「色彩協定」の試みを一部エリアで導入。

カラーコードの作成はまだ1年目を終え、2年目に入ったところだ。道筋は描いても、まだ見えていないことが沢山あるのだらうと感

じている。将来的には専門家と住民が中心となった「景観デザインレビュー」の仕組みをこの町に根付かせ、白濁エリアならではの大切な景観を住民自身で次世代へ引き継いでいきたい。それは自分のまちを大切に作り続けるという意思を皆で持ち続けるということなのだと感じている。

## 結びに

建築士会全国大会大阪大会において、まちづくり賞の優秀賞をいただいたことは、白濁エリアで活動続けてきた私たちにとって大きな励みとなった。日々の小さな実践や対話の積み重ねが、建築士会全国大会という場において評価されたことは、協議会のメンバーだけでなく、活動に関わってきた住民や事業者にとっても喜びとなり、「これまでやってきたことは間違っていなかったのだ」と感じられる機会となった。今後も住民、事業者、専門家がともに考え、ともに手を動かしながら、白濁エリアらしい景観と賑わいを育てていきたい。本事例が、各地でまちづくりに関わる建築士にとって、一つの参考となれば幸いである。

### きたわき・よしひろ

出雲市在住。(有)北協建築設計事務所 専務取締役、島根県建築士会 まちづくり委員長

### つぼくら・なみ

松江市在住。コクーン設計舎 代表、(株)天神Products 代表取締役、加茂福酒造(株) 取締役、島根県建築士会 会長



図6 緑地モックアップ



図7 ハンドブック

# まちづくり優秀賞

事業名 空の特攻、海の特攻、  
支部広域連合による戦争遺構のまちづくり

受賞団体 大分県建築士会宇佐支部、別府支部 | 活動地域 大分県宇佐市、日出町

浅野 健治 | 株式会社 浅野建設 / 浅野住環境デザイン 代表取締役 / 大分県建築士会



## 2つの特攻基地

大分県宇佐市と日出町には太平洋戦争時の旧日本海軍の特攻基地がありました。宇佐市の宇佐海軍航空隊基地、日出町の大神回天基地は、それぞれ空と海の特攻部隊の基地でした。

宇佐海軍航空隊基地は空の特攻、零式戦闘機と特殊滑空機「桜花」を配備された基地でした。「桜花」は一人乗りの特攻兵器で、エンジン・プロペラ・脱出装置がなく、ひとたび発進すれば生還の見込みが全くないので、人間爆弾とも呼ばれていました。零戦を格納していた掩体壕、落下傘整備所な

どが今も残っています。大神回天基地は、海の特攻、人間魚雷「回天」の訓練基地でした。回天は魚雷を改造した特殊潜航艇に搭乗し、敵艦に体当たりする兵器で、一度出撃すれば生還することはできないものでありました。回天格納庫や魚雷調整プールなどが今も残っています。

宇佐市と日出町は国東半島の付け根にあり、直線距離で約30kmです。太平洋戦争末期の沖縄から北上する米軍を迎え撃つための、基地構築の位置と考えられます。

そう遠くない2つの地域にそれぞれ特攻基地の戦争遺構が残っているということで、それを活かして広域の支部で連携してまちづ



写真1 「桜花」の実物モデル(宇佐)



写真2 回天原寸模型(日出)



図1 タイトル画(大分県建築士会美術部製作)

当時は憂国の下、『七生報国』を胸に抱き……

くり活動を進めていくことによって、相乗効果や活動の拡がり期待できる取組みです。

図1は大分県建築士会美術部で製作したこの活動を象徴したタイトル画ですが、左側が宇佐平野の上空に戦闘機が飛ぶ宇佐の基地、右側が入江に戦艦を想定して訓練する日出の基地のイメージです。そういった特徴的な景観を戦争遺構に関係付けてまちづくりを進めています。戦後80年、戦争を知っている世代の方が少なくなる中、今なお残る戦争遺構に建築士として、現状に向き合い、平和を願い後世に伝えていく活動です。

## それぞれの地域の景観

宇佐は広大な平野に各施設及び滑走路が配置され、基地の周辺に掩体壕が造られています。日出は入江の海岸線に沿って、格納庫や整備場が配置され、その奥に兵舎などが配置されています。

それぞれの基地のある地の景観の特徴は、宇佐は平野の田園風景が広がっており、一方、日出は入江と丘陵地の風景を呈しています。

それぞれの特徴的な地形がそれぞれの基地の形成に適していたため、それぞれの地に基地が造られたと考えられます。

宇佐は艦上攻撃隊の練習航空隊のため広大な平地が必要だったこと、日出は回天の秘密訓練のため奥まった入江が必要だったと考えられます。

今も残る「戦争遺構」と「景観」を広域で連携して後世に伝えていくことを目的として、活動を行ってきました。

両地域とも歴史は古く、宇佐平野には宇佐神宮があり、八幡社の総本宮として古くから多くの参拝者が訪れています。また、日出

の深江は昔から天然の良港で、木下藩の殿様が参勤交代の際に潮待ち、風待ちをしたとされる「襟江亭」と呼ばれる風待ち茶屋が現在も残っています。そういった両地域にその自然の地形を活かした特攻基地が造られることとなったのです。

宇佐神宮、襟江亭をはじめとした古くからの歴史と戦争遺構が残っていることもその地域の地形によるものであるため、それらの歴史的背景を踏まえて、まちづくりを進めることが必要と考えています。



写真3 掩体壕(宇佐)



写真5 宇佐神宮

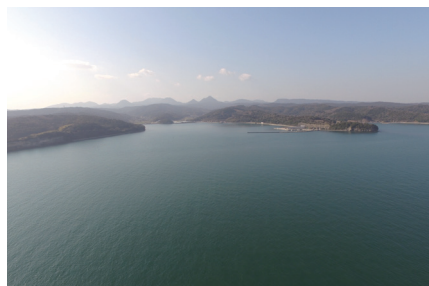


写真7 海からの国東半島の景観

また、広域的な景観に関して、国東半島にある国東支部、高田支部とも連携して、海から見える国東半島の景観の調査を実施し、良い景観や課題の整理などを行っています。戦争遺構を活かしたまちづくりを広域で進めるとともに、その特徴的な景観を周辺地域とも連携して観光への波及も視野に入れた取り組みを行っています。会員が減少している中、近隣の各支部が連携しながら広域的に活動を行なうことは今後必須と考えています。



写真4 魚雷調整プール



写真6 襟江亭



写真8 海からの景観調査の様子

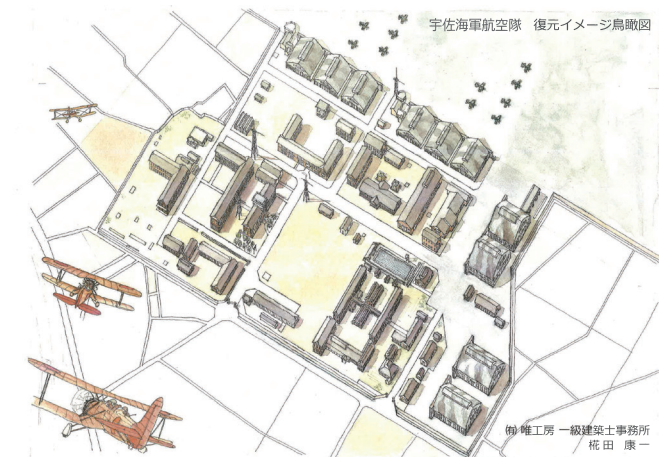


図2 宇佐海軍航空隊基地配置図(宇佐支部作成)



図3 大神海軍基地配置図(別府支部作成)



写真9 宇佐の田園風景



写真10 日出の入江と丘陵地の風景



写真11 宇佐海軍航空隊基地模型 【宇佐支部作成】1/700



写真12 大神海軍基地模型 【別府支部作成】1/700

## 模型の作成

建築士の技能を活かして、それぞれの地形の特性を見える化するために、各支部で基地の模型を作成しました。ジオラマ模型の作成により、地形的な状況が上空から見下ろしたように見えるようになり、両基地の景観特性の違いがよく理解できます。

模型の展示会、講演会等を通じて、戦争遺構のまちづくりのPR、提言等を行うなどして、多くの方にそれぞれの基地の地形的な、景観的な特徴を感じてもらいました

## 戦争遺構を活かしたまちづくりの取組み

戦争遺構を活かして各地域でまちづくりの取組みを行っています。宇佐では、基地模型を使った子どもを対象とした平和教育、現存する掩体壕での平和教育、宇佐市平和資料館における模型展示などを行っています。掩体壕などの模型も作成しています。



写真13 基地模型を使った平和教育(宇佐)



写真14 建築士会主催のシンポジウム(日出)



写真15 現存する掩体壕での平和教育(宇佐)



写真16 大神回天記念公園と資料提供した看板(日出)



写真17 宇佐市平和資料館の零式戦闘機と模型

日出では、日出産業祭での模型展示、シンポジウムの開催、看板やパンフレット、DVD作成の支援等を行っています。

ともに広く住民に戦争遺構を広め、平和を考えてもらうこと、模型を同時に展示するなどして、景観や周辺のまちづくりについても様々な提言を行うなどの取組みを行っています。

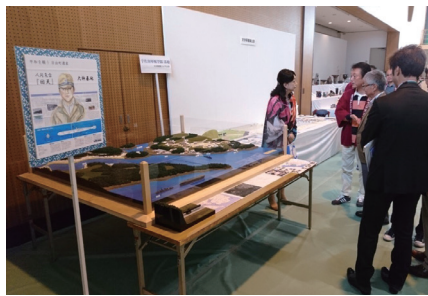


写真18 日出町産業文化祭での模型展示

## まちづくりの成果

戦争遺構を活かしたまちづくりを進めることにより、多くの住民を巻き込み「戦争遺構」の認識が深まってきています。また、「平和教育」が広がり、観光への波及、修学旅行の誘致などに繋がっています。さらに、宇佐と日出に隣接する国東半島の景観面での連携などによる、建築士活動の広域的な活動を広げています。本来「建築」は人を幸

福にする器であり、時代に翻弄される建物であってはいけないものと思います。

戦争遺構のある地域の建築士として、自分たちのアイデンティティーを高め、それに向き合い、後世に伝えていこう、これからも情熱を持って、活動を継続していこうと考えています。

## 今は・・・

宇佐は広大な麦畑で「いいちこ」に代表される麦焼酎の産地となっています。また日出の大神は天然の良港で漁港として栄えていて、二階堂麦焼酎も製造されています。戦争時に地形を活かして特攻の基地が造られた両地ですが、元々の地の利を活かして今はそれぞれ発展しています。

戦争遺構を語り継ぐとともに、良好な景観を広域的な観点から活かしていくまちづくりを続けていくことで、さらなる地域の活性化に繋げていきたいと考えています。



写真19 宇佐平野の麦畑



写真20 日出(深江)の漁港



写真21 旧日本海軍基地跡にアメリカ合衆国ハワイ州の州旗がなびいている。平和のリアルがここにある。

### あさの・けんじ

1959年大分県生まれ。大学卒業後、地元ゼネコン、建築設計事務所を経て、建築士と大工職人の会社経営

# まちづくり優秀賞

事業名 地域のひろばをつなぐ Common Loop

受賞団体 一般社団法人 baamu lab. | 活動地域 大阪府東大阪市 石切・日下地域

仙入 洋 | 一般社団法人 baamu lab. 代表理事 / 株式会社 遊墨設計 代表取締役 / 近畿大学建築学部 非常勤講師 / 大阪府建築士会会員



## 新駅開設による商店街の衰退

大阪府東大阪市東部の生駒山麓に位置する石切地域（東石切町）・日下地域（日下町）を中心にまちづくり活動を実践している。でんぼの神様として知られる石切神社と参道商店街を中心とする石切地域は信仰の町として知られ、それと隣接する閑静な住宅地である日下地域は古事記や万葉集にも登場する神話の町として親しまれている。

この地域の課題は、新駅（新石切駅）開設による参道商店街の衰退とそれに伴う空き家（店舗）・空き地の増加である。かつては生駒山中腹の近鉄石切駅から石切神社へと山の斜面沿いに下るルートが商店街として賑わっていたが、1986年に西側平地に新石切駅が完成し、石切神社参拝者の流れが大きく変わった。神社参拝前後に商店街を上る人が大幅に減少し、商店街衰退に繋がっている。その商店街の活性化を軸に、空き家（店舗）・空き地の有効活用により地域全体を活性化することが目標である。

## 地域と大学と専門家の連携

きっかけは、石切地域の地主から地元の近畿大学への相談である。2019年に商店街衰退を危惧する地主から、自身が所有する石切神社鳥居の斜め前、参道商店街の起点に商店街と地域を活性化する拠点となる土地活用（施設）の提案を求められた。

それを機に、近畿大学として地域・商店街・神社を巻き込んだ包括的な活動を推進するために、任意団体「石切のわ」を設立した。そのメンバーは地域住民、商店街店主、大学教員・学生、専門家から構成される。

「石切のわ」は現在も石切地域にて活動継続中であり、その中の有志メンバーが2021年に（一社）baamu lab.を設立し、「石切の

わ」とも連携しつつ、隣接する日下地域も含めたまちづくり活動を進めている。

## 「ひろば」をつくる

まちには余白としての広場が多数点在している。石切参道商店街を例にとると、神社境内、商店街なども人が集まる広場といえる。そこに新しい仕掛けとしての「ひろば」を挿入することにより、まちの広場群の再構築を目指す。建築物の有無に関わらず、人が集まる場を「ひろば」と称し、地域の空き家や空き地を「ひろば」として整備する。まちに刺激を与え、地域活性化を誘発する「ひろば」づくりを通し、まちづくりを実践している。

以下に主要な3つのひろばづくりを通し、我々のまちづくり活動を紹介する。

## ひろば1：石切回廊

東大阪市の石切神社前、石切参道商店街の西側起点に商業施設と集会所からなる地域活動の拠点を新築した。2019年に始動した本計画は、神社や商店街を含めた地域を巻き込みながら、地元の大学と建築士が協働で企画・設計から運営にまで携わっている。

この地域を活性化させる拠点として、どのような施設が必要か大学と協働で調査・分析し、地域住民とのワークショップを通して意見交換し、十分なフリースペースをもつ商業施設と集会所からなる施設の計画を決定した。

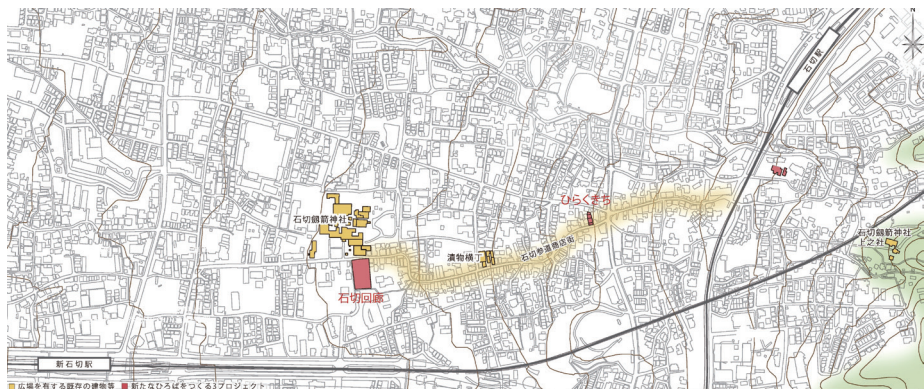
設計段階でも大学と連携しつつ学生のアイデアを募り、施主プレゼンを通して方針を



石切神社



石切参道商店街



石切参道商店街周辺MAP

定め、実務的サポートを行いながら設計作業を進めた。建築の特徴として、大きく3つ挙げられる。1つ目は地域の景観に配慮した外観。商店街の街並みと背後の生駒山を意識し、ボリュームを分節した勾配屋根とした。2つ目は建物内外を貫く回遊性。石切回廊の名の通り、建物内外を跨ぐように回廊を配している。3つ目は庭と一体化した平面計画。西に大きく確保した庭（にぎわいひろば）との一体利用を可能にしている。

施工段階では地域や大学が関わることのできる範囲は限られるが、既存建物解体後の空き地で完成建物の告知を兼ねた屋台ワークショップを学生主体で実施し、仮囲いを商店街の紹介看板として利用するなどした。

建物完成後は、施設運営に関わる仕組みをつくり、運営サポートを行いながら、様々なイベント開催に尽力し、地域活動の拠点化を目指している。

与条件から建築を創出するだけでなく、与条件を地域と共に考え、竣工後もそのあり方を地域と共に模索することに、建築士の職能の新しい可能性を感じる。



地域住民と大学生を交えての意見交換会



石切回廊外観



石切回廊 配置図・平面図



空き地での屋台ワークショップ



仮設の囲いに商店街紹介パネルの設置



石切回廊での1周年アートイベント(撮影:高野友美)

## ひろば2：ひらくきち

石切参道商店街の坂の中腹、店舗の連なりが途切れつつあるところに地域交流拠点「ひらくきち」は位置する。2023年に5年ほど空き家だった店舗付住宅を近畿大学が借り受け、学生シェアハウス兼サテライト研究室として活用を開始することになった。そして、そこに住む大学院生が主導しリノベーション設計や地域住民を巻き込んだDIY、地域交流拠点としての運営に携わり、これまでこのまちに訪れることのなかった人々が多く訪れる新たな拠点となった。

その後、学生の卒業に合わせて、2024年

4月より運営を（一社）baamu lab.が担うことになり、1階をギャラリー、2階をシェアハウス・シェアアトリエとして活用し、地元の学生や地域のクリエイターと協働するプラットフォームを実現している。

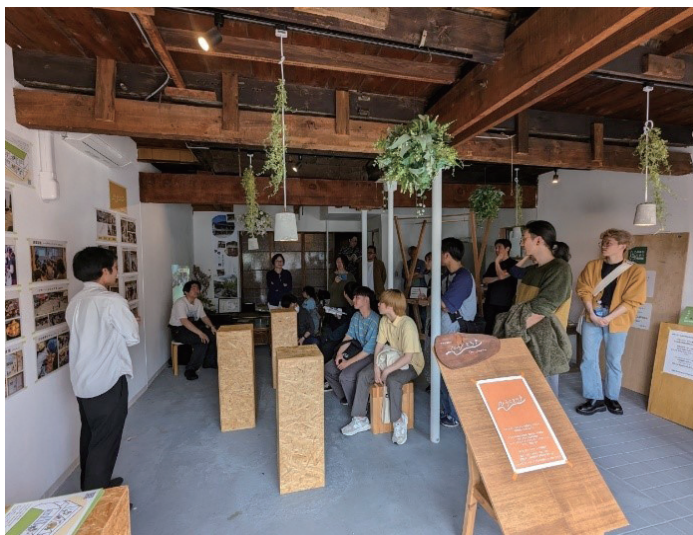
## ひろば3：里松文化

2021年の夏、石切の隣の地区である日下の文化住宅「里松文化」のオーナーから、「空き部屋が多いのでリノベーションをして住みたくなるような家にデザインしてほしい」と相談があった。当時、全12戸中10戸が空き家であった。

しかし、里松文化に空き部屋が多いのは、

デザインだけの問題ではないと判断し、住まいとしての活用以外の方法を考え、仕事場やアトリエ、趣味の部屋など、暮らしの中に新たな拠点をもてるような場所にしたいと考えた。そのような経緯から（一社）baamu lab.として一棟借りし、企画・運営することにした。

そのコンセプトを「自分らしく心地よい暮らしのできる場所」と掲げ、新しい暮らし方やなりわいを、自分らしく実現できる場所を目指し入居者を募り、定期的に「文化びらき」というイベントを開催している。その甲斐あって、若いアーティストや地元のクリエイターらの入居が決まり、新たな文化活動の拠点となりつつある。



ひらくきちのお披露目会に地域住民を招待



里松文化での「文化びらき」



ひらくきちの整備では地域住民とDIY実施



里松文化の一室での写真展

## 関係性のデザイン／縁をつくる

建物をつくる際にはオーナー(施主)の要望、予算、法規制、関係者からの要請など、相矛盾する多様な要素を統合する必要がある。公共性の高い建築となると、利害関係者はさらに増え、状況はより複雑となるため、その関係性を整理・分析することが建築士にとっては必要である。

モノのデザインから関係のデザインへ。人と人、人とモノ、人と場、場と場など、実体ある対象ではなく、その関わり方に注目し、目には見えない関係をデザインすることが重要である。我々は、施主・地域・大学・専門家などがうまく関わるができる仕組みづくりを目指した。

## プロセスの共有／過程をつくる

周辺地域への影響を考えると、建物はオーナー(施主)のものであるだけでなく地域の共有財産でもある。商業施設や地域の活動拠点となると、地域にどのように受け入れられるかが重要である。地域にとって、建物の存在を他人事ではなく自分事にするため、そのプロセスを共有する仕組みを考えた。

自分が思考を巡らせ、手を掛けて作ったモノにはおのずと愛着が沸く。そこで、地域の建物は地域の人にできるだけ考え、手を掛けてもらおうと意図し、企画・設計・施工・運営の各段階で地域や学生が参加できる仕組みを実現した。



石切・日下地域をつなぐCommon Loop (2024年4月現在)

## Private (私) から Common (共) への転用

石切・日下地域での実践を改めて振り返ると、個人所有の土地・建物がある目的をもった人々が使える場に変換していることが特徴的である。Privateな私的空間をCommonな共用ひろばへと転用しているのである。そのひろばの管理責任者を明確に

し、趣旨を共有する者が積極的に使うという仕組みに、まちづくりの新たな可能性を感じている。

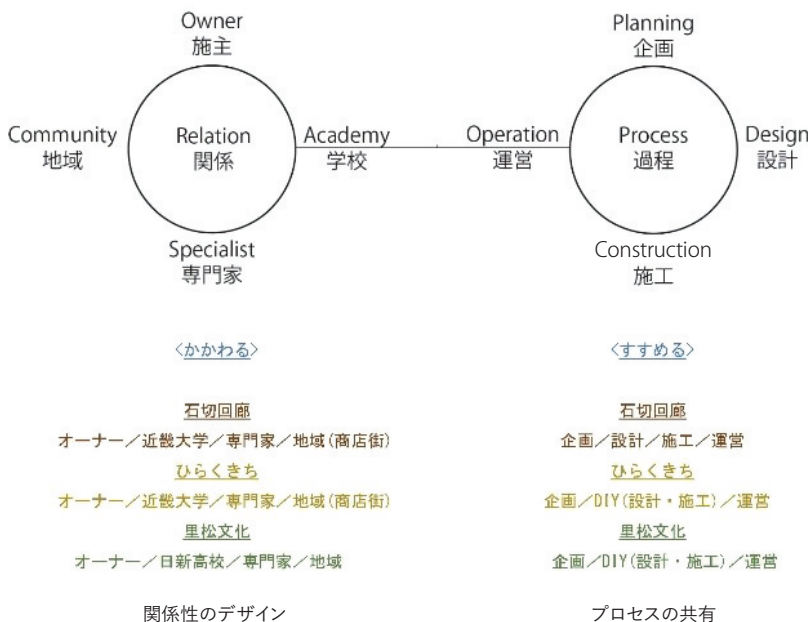
## 場を編む Commonとしてのひろばをつなぐ

我々は、教育機関(大学)と専門家(建築士ほか)が協働しつつ、地域のサポートの下、Publicではなく、規模の小さいPrivateな場(土地や建物)を整備し、Commonひろばとして開放し、それをLoop状につなぐことを試みている。小さな点を数珠つなぎにし、円環状に取り囲むことにより、線から面へのさらなる拡がりを目指している。

「ひろば」=「人」+「場」であり、人と場所が共存して初めて人が集う「ひろば」となる。「場」を整備し、そこに集う「人」を見つけて出すことが重要であり、まちづくりは人探しとも言える。「関係性のデザイン」と「プロセスの共有」を通じた「Common Loop」の実現を通じ、これからも地域活性化を実践し続けたい。

### せんにゅう・ひろし

1971年東大阪市生まれ。2002年遊墨設計設立、2015年同法人化。2021年(一社)baamu lab.設立。設計とまちづくりの事業両立化を目指す。まちづくり専攻建築士。大阪府建築士会記念行事担当部門長



# まちづくり奨励賞

事業名 お堀で地域をつなぐ水鏡プロジェクト

受賞団体 水鏡プロジェクト実行委員会 | 活動地域 佐賀県佐賀市

向井 浩史 | 水鏡プロジェクト実行委員会 委員長 / 佐賀県建築士会



## 何を? どこで? なぜ?

水鏡プロジェクトは佐賀城のお濠を利用した灯かりのイベントです。

開催場所は佐賀県の中心部に位置し、県立の文化施設を内包する県立都市公園内のお濠です。お濠は江戸時代、佐賀藩の居城があった城跡の外濠で、県木である大楠が多数あり、春には桜の名所としても知られています。また、周辺地域の住民たちが蓮の再生をしたり、遊歩道を散策したりと一年をとおして、市民を楽しませてくれる場所であり、多くの人が生活の一部として利用しています。

佐賀城公園周辺は住宅地であるため、夜間街灯などの灯りも少なく、佐賀市中心街と比べると物静かな空間です。しかし、周辺道路の信号機の灯りや無造作に行きかう車のヘッドライトの灯りがお濠を照らし、行きかう車のエンジン音がこの空間に響いており、ただただ暗い「濠」としてのイメージが定着しています。しかし、ふと空を見上げると星空や月の明りが見え、その明りが濠の水面に鏡のように映し出されています。この風景をみて、「どれだけの人が、この風景に気づくのだろうか?」「水面に映る星空や月の明りを楽しむ時間や空間を創り出すことも夜の景観の一つになるかもしれない。」という思いのなか、水鏡プロジェクトはスタートしました。

水鏡プロジェクトでは人工的な灯りを使い、あたかも夜空の星を鏡のように写し取ったかのように演出することで、佐賀城公園内の濠において夜の景観を作り出そうとしています。また、景観を創り出す行為に、①地域住民、学生、行政など多くの人が参加することで新しいコミュニティを作りだす、②このプロジェクトが地域に根付き佐賀を代表する景観となり歴史の一つになっていく、③この風景を見に来る人が増えることにより新しい観光資源を作りだす、このような目標を立て2016年より



写真1 お堀に映る灯り(2025)

佐賀県建築士会佐賀三地区青年委員会が主体となり実施してきました。現在、地域コミュニティを作るという目的のもと市民活動団体「赤松まちづくり協議会」と一緒に水鏡プロジェクト実行委員会を立ち上げ、地域住民や多くのボランティアの協力のもと活動を続けています。毎回プロジェクト実施に向けて何度も会議を行い、灯りの配置計画や実施内容の議論を活発に行い、灯り製作や色付けの協力を地域住民や小学校にお願いしながら作り上げています。(写真1)

## 建築技術者としての工夫

灯りは和紙、ロウソク、竹櫛、台座の簡単な材料で構成しています。具体的には硬質ウレタンフォームのように軽量で水に浮く台座の上にロウソクと竹櫛を固定し、和紙で作った四角柱の明りを被せ、火を灯すシンプルな作りものです。無駄なく材料を使用することや水面で安定することを考慮し、見栄えの良い最小サイズを検討し、910×1820サイズの硬質ウレタンフォームより303×303の台座を18個、同サイズの障子紙より455×200の灯り

を18枚確保するといったコストを抑える工夫をしています。このような灯りを会場全体の遊歩道と水面に配置しています。水面近くの遊歩道の灯りは毎回付近の小学生や地域住民に作成していただいております、自由に色付けを行って配置しています。(写真2)

水面に浮かべる灯りは浮かべるだけでは風に流されてしまうので、糸で灯りを連結することで流されず同じ場所にとどまり続け、長時間の景観を創り出すように工夫しています。とは言え、多少の糸の伸び等があり、風で微妙に移動してしましますが、この微妙な移動が一定の整然とした灯りの模様に変化を加えることで飽きない灯りの景色を楽しむことが出来ます。また、この工夫が水に直接入ることなく、護岸から作業することを可能とし、準備や撤収を簡単にし、結果的に最小限の労力と時間で作業ができることを可能としています。それでも一旦水面に配置した灯りは再度点火することが難しいため、途中で消えてしまった灯りはカヤックを使い再点火するようにしています。毎年少しずつ数を増やし、作業をスムーズにするために、毎回

配置計画図を作成しています。その計画図にもとづき固定用の糸作りや当日のスタッフ配置、作業内容を決めています。(写真3)

## コロナ禍を乗り越えた先に

まちづくりの一つとして建築士に何かできることはないか?と考える、当初実験的に始めたイベントですが、将来的には地域の人、その他多くの方が関わることができるようなビジョンを描いてました。どのようにこのイベントに関わってもらうかを地域の人に説明していくうちに、段々多くの人に関わってもらえるようになってきました。当初は人員も少なく、少ない灯りしか配置できないことや雨天で延期になった際の人員確保などが問題でしたが、徐々に参加者も増え、ようやく規模拡大を考え始めた矢先にコロナ禍で人が集まらない、集めにくいといった状況になりました。開催自体もどうするかと非常に悩まされ、存続を考え直そうとしたところ、関わっていただいた地域の方に「この灯りを将来に繋げたい」と

言われ、皆さんの協力のもと「水鏡プロジェクト おほり灯ろうまつり」と名称を変更し、規模を縮小しながらも存続してきました。現在は行政の理解と協力もあり、「佐賀さいこうフェス」という催しと同日開催とし、お互いに協力することで多くの方に来場していただき、楽しんでいただけるまでになりました。特に灯りを作成した小学生や関係者の楽しそうな会話が会場に響いています。

2025年は関係者およびボランティアの数合わせて200名程度の方が集まりました。(写真4) 水面の灯り、小学生作成の灯り、プログラムを使用したLED灯り、佐賀の伝統工芸である名尾和紙を使った灯り、建築士有志作成の灯りなど多くの種類の灯りを配置することができ、プロジェクトの道筋が明確になりました。(写真5) また、当日は音楽ライブを開催し、会場の雰囲気や音色を聴きながら、水面に映る灯りを眺める贅沢な時間を楽しむことができました。(写真6)

## これからの展望と目標

今後の展望としては継続的に続けている近隣小学校の5年生による灯り作りをとおし、小学校生活の中で一度はこのイベントに関わってもらい、将来大人なってからもイベントに参加したいと思ってもらうこと、ボランティアとして参加して頂いている留学生の方の心に残り、母国に帰ったときに再度佐賀を訪れたいと思ってもらえるようなイベントとすること、地域の方が楽しく笑い繋がりを持つコミュニティを作ることなどを考えています。将来的には佐賀城のお濠全体を使って多くの人に関わってもらいながら約1万個の灯りを灯す大きな目標を持っています。

### むかい・こうじ

1976年佐賀県生まれ。地元設計事務所を経て向井建築構造計画設立。構造設計の傍ら、だれでも楽しめるをもっとにイベントの主宰、地域活動に参加、フィンランドの伝統装飾品ヒンメリの製作や講師を続けている。構造設計一級建築士



写真2 小学生製作の灯り



写真3 陸上からの灯り設置状況



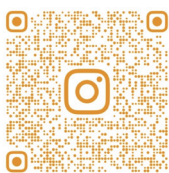
写真4 地域住民・留学生ボランティア



写真5 プログラムで点灯するLEDの灯り



写真6 ライブによる音と空間



◎MIZUKAGAMI.SAGAAKAMATSU

# まちづくり奨励賞

事業名 パッチワークプロジェクト

受賞団体 まちづくり会社 株式会社パッチワーク AKIHA (秋葉区まちづくり協議会)

活動地域 新潟県新潟市秋葉区

馬場 一也 | 株式会社 パッチワーク AKIHA 代表取締役 / 秋葉区まちづくり協議会 代表 /  
株式会社 馬場工務所代表取締役 / 新潟県建築士会



## パッチワークプロジェクト これまでの流れ

- 2018 勝手連的に新潟薬科大学の学生や地域の大人でまちづくり妄想
- 2019 行政との先進地視察（北九州市小倉）・八帖二間オープン
- 2020 ハチフタを中心とした新津本町中央公園パッチワークエリアで活動
- 2021 新潟市秋葉区初のまちづくり会社・パッチワークAKIHA設立
- 2022 ゲストハウス設置に着手（秋葉区まちづくり協議会設立）
- 2023 ゲストハウス・スロウハウスオープン、マチャーシャプロジェクト  
新潟市秋葉区との協働（AKIHA移住コンシェルジュ・未来ビジョン）
- 2024 各地視察受入れ（建築士会関東ブロックまちづくり交流会など）
- 2025 新潟市秋葉区と連携し地域おこし協力隊の受入れ

## 勝手連の活動から徐々に大き なうねりに

2018年頃、新潟県新潟市秋葉区にある新潟薬科大学の学生たちと、地域の大人たちがまちづくりの夢を語り始めたことがパッチワークプロジェクトの原点となります。しかし、この夢を語る場はすごく大切だと感じましたが、実際にこの夢を誰が実現するかという実行段階になると、誰も一歩前に踏み出すことが出来ないのが現実でした。翌年2019年に大きな転機がありました。その転機とは、新潟市秋葉区の行政マンたちとの福岡県北九州市小倉地区のまちづくり視察であります。小倉地区はエリアリノベーションというま



図1 パッチワークエリア

ちづくり手法により、小さなエリア内に空いている建物を次々にリノベーションして活用していく地域活性化を行ってまいりました。このまちづくり手法を視察して感じたことは、同じく空き家・空き店舗の増加している新潟市秋葉区においても、この手法を取り入れることが出来るのではないかといいました。改めて2020年に想定エリアとしてJR新津駅東口側に存する新津本町中央公園（旧新津市役所跡）を中心とした半径250mをパッチワークエリアと名付けました。（図1）

まずパッチワークエリア内において行った活動として、エリア内の空き家・空き店舗を巡る空き家・空き店舗ツアーを行うのと並行して新津本町中央公園を舞台とした定期マルシェなどに力を入れました。元々商店街がある地域でしたが、郊外に大型店が出店したことにより少しずつ当時の盛況が薄れたエリ

アにもう一度目を向けてもらうことが目的でした。（写真1）

ツアーやマルシェを定期開催することで、徐々にではありますが、市民の皆様・行政からも活動を知ってもらい応援していただけるようになってきましたが、まだ空き家・空き店舗を思い切ってリノベーションして活用するといったことは数えるほどでした。



写真1 パッチワークマルシェ

## 新潟市秋葉区初のまちづくり会社設立へ

どこの地域でも問題となる結局いつ誰がどうやってやる問題が解決されないと、プロジェクトは前に進みません。イベントを行っていっただけでは、みんな疲弊し何か形として残らないそんな繰り返しを打破するために、2021年にいよいよ仲間たちと共に株式会社という法人スタイルでまちづくりを行っていくことを決めました。18名の出資者の応援のもと、1750万円の資本金を集め(株)パッチワークAKIHAというまちづくりを専門にする会社を立ち上げました。誰がいつまでに何をやる、そんな簡単そうで難しいことへのチャレンジが始まりました。会社設立にあたっての当時の地域課題を列挙します。

- ・まちづくりに対して、各分野で活動されているプレーヤーはいるが、その各分野を効果的に結びつける人(コンダクター)や合同活動拠点(ハブポイント)が圧倒的に不足している。
- ・新津地域内の宿泊施設の廃業に伴う宿泊施設の慢性的な不足が指摘されて久しいが、なかなか見通しが立っていない。
- ・国の施策であるインバウンドへの対応はもちろん、アフターコロナを見据えたマイクロツーリズムでさえ受入れが厳しい状況。
- ・新潟市が推進している学生×地域の魅力探求プロジェクト「トビラ」があるが、秋葉区からは受け入れ地域が出ていない。
- ・ビジネスの横のつながりが比較的弱い。例えば、農業生産者－商品開発(飲食店)－販売ルート(小売店)など。
- ・高齢化、人口減少、空き家や空き店舗増加に伴うエリアの価値減少、パワーダウンが発生してきている。
- ・秋葉区にはTMO(中心市街地における商業まちづくりをマネジメントする機関)やDMO(観光地域づくり法人)が存在しないため、行政主導になりがちなためスピード感の欠如やエリアの良さを発信できていない。
- ・上記の地域課題は氷山の一角にすぎないが、まちづくり会社が設立されることにより、地域課題解決と共にエリアマネジメントが推進されエリアの価値向上に寄与することが考えられる。

これらの課題山積の地域状況をチャンスと考え、以下をメンバーの使命・事業内容としてまちづくり会社は船出をしました。

### 私たちの使命

ひとが針と糸となり、この地にある資源を縫い合わせることで、1枚の“気づきの布”という作品を創る

### 使命に込めた想い

株式会社パッチワークAKIHAの事業に関わる者は、自らが針と糸として個性の違うエリアや人といった地域資源を率先して縫い合わせることで、より魅力的な1枚の布を創り上げる。

出来上がった作品が関わった全ての人たちにとって根源的な価値について考える機会や気づきを与えてくれるものであることを目指す。

今ここにあるものを活かして新たな価値を創る。それぞれの端切れは見慣れて古びたように感じられるものであったとしても、それらを縫い合わせることで新たな価値を生み出す。

### 事業内容

- ① 宿泊事業(古民家や蔵などを活かした宿泊施設の整備・賃貸・運営)
- ② 地域食材の販売及び活用(新潟県科大学・地元農家・既存店との連携)
- ③ 不動産のマッチング及びリノベーション(空き家、空き店舗対策)
- ④ 移住定住促進事業(区外からの移住希望者へのサポート・アキハスプロジェクトとの連携)
- ⑤ ワークেশンの受け入れ環境構築(アフターコロナに対応すべく準備)
- ⑥ 地域の魅力発信(ネット等による情報発信、着地型観光推進、まちやど気運醸成)
- ⑦ まちづくりコンサルティング(提言活動及び関係各所との連携等)



写真2 地域の方々と古民家のリノベーション

- ⑧ 教育・芸術分野との協同(区内教育機関及び芸術団体とのコラボ)
- ⑨ その他(会社設立趣旨に沿った事業)

## ゲストハウス・スロウプハウスオープンへ

最初に着手したプロジェクトは、新潟市秋葉区に一軒も無くなっていた宿泊施設の復活に向けたものです。とにかく地域の方々の巻き込みながら、一緒に古民家のリノベーションを行い前に進みました。(写真2)

国の農林水産省農泊推進事業の助成もいただきながら、2023年11月3日に宿無しエリアにゲストハウス・スロウプハウス(坂の途中にある古民家)の灯りを灯すことができました。(写真3、4)

まちづくり会社としての実績が増えていくことで、行政からも頼られる機会が増えてきました。地域への移住者受入れの窓口としてのコンシェルジュ機能、地域の未来を考えるビジョンづくりのお手伝いなどです。まだまだ地域課題がたくさんあるエリアだからこそ、課題克服をエンジンとしてパッチワークプロジェクトはこれからも前へ進んで参ります。引き続き応援くだされば幸いです。感謝。



写真3 ゲストハウス・スロウプハウス



写真4 パッチワークAKIHA仲間たち

### ばば・かずや

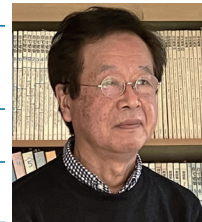
1974年新潟県生まれ。大学で経済学を学んだあと、一級建築士を取得、工務店経営の傍ら仲間たちとまちづくり会社を立ち上げ、行政ともタッグを組みながら地域活性化に取り組む

# まちづくり奨励賞

事業名 鹿島市肥前浜宿のまちづくりの25年これまでとこれから

受賞団体 肥前まちづくりデザイン研究会 | 活動地域 佐賀県鹿島市

馬場 泰造 | 肥前まちづくりデザイン研究会理事長



## 肥前浜宿

佐賀県の西南に位置する鹿島市は南を多良岳山地を境に長崎県大村市と接し、北は白石平野、西は嬉野市、東は有明海に面しています。その中で肥前浜宿は市南東部に位置し、多良岳山系から有明海にそそぐ浜川河口にあります。中世の在郷町に起源し、古くから有明海の漁業を生業とした漁師町が成立、江戸時代には長崎街道太良往還の宿場町として栄えました。そして、地元平野の米と多良岳の伏流水を利用した酒造が生まれ、大正から昭和初期の最盛期には酒蔵が多く建ち並ぶ醸造町として発展しました。現存する伝統的建造物の多くはこの時代の産業や生活を色濃く残すものです。昭和30年代までは古き良き建物は充分手入れが行き届かないものの何とか残り続けていました。

しかし、その後は時代の波に押され地場産業は衰退する中で平成に入り家屋の老朽化は一刻の猶予もない深刻な状況となっていました。その中で地元有志の保存運動が立ち上がります。「輝いていた時代の故郷の原風景を何とか残し、未来に繋げたい」との思いは私たち地元建築士も知るところとなり、私たちができることは何かを問う中で保存活動に一人一人と参画していくこととなります。ただ、当初においては保存の意義や制度に懐疑的な住民も多く、必ずしも肯定的

な意見ばかりではありませんでした。

そこで私たちは肥前浜宿まちづくりデザイン研究会(現 肥前まちづくりデザイン研究会)を立ち上げ鹿島市や佐賀大学と共同しながら将来を見据えた保存の有り方や街なみ環境整備計画・再生利活用の提言策定などを行う中で少しずつ住民の理解へとつながっていききました。最初は平成14年(2002年)に鹿島市に寄付されて江戸時代は人馬の継ぎ立て場であった「継場」(旧前田家)の修理モデル事業の計画が始まりました。鹿島市にとっては住民の意思を確認するための大英断の事業でした。次に平成16年(2004年)東京のとある実業家によって「茅葺き民家の保存に」と多額の寄付がなされ旧乗田家の修理が実現することとなります。私たちデザイン研究会の組織だった活動の出発点でした。

維持運営を地元保存団体であった「肥前浜宿水とまちなみの会」(※この時点でNPO法人化)が受け皿となり、私たちはその傘下として専門的支援を行う立場となって個々の建築しか携わらないと思っていた建築士が街づくりの一端を担うことを地元や行政から正式に認知される最初のきっかけとなったのです。やがて、これらの活動は地域住民の保存への機運の高まりとなって平成18年(2007年)庄金地区と八宿地区が2地区同時の重要伝統的建造物群保存地区指定となりそれ以降、現在までの活動へと繋がっていききました。



昭和50年代の浜宿と有明海



昭和50年代の浜川沿い民家



浜中町八本木宿酒蔵通



浜庄津町金屋町



旧乗田家



佐賀県鹿島市



浜庄津町金屋町伝統的建造物群保存地区



研究会例会

## 肥前浜宿街なみの特徴と可能性

私たち肥前まちづくりデザイン研究会（以下、デザイン研究会と略）は地域のアイデンティティーはその歴史や自然風土にあり、それを活かすことがすなわち街づくりや地域おこしにつながるとの信念のもと活動を続けてきた歴史でもあります。文化庁は指定理由に庄金地区は「茅葺町家が棧瓦葺町家が軒を連ねる在郷町」、八宿地区は「居蔵造町家が建ち並ぶ醸造町」という性格付けを附しています。

庄金地区は茅葺町家が連続して建つ木造密集市街地という点で八宿地区は初めて醸造町という種別で選定された町並みという点でも全国的にも特異な町並みと言えます。通りに面する町屋に混在する茅葺民家や酒造元が擁する小規模複数の酒蔵空間の存在が十把一絡げに分類できない多様な顔を持つ街空間として今後新たな展開をなす可能性を秘めていると考えています。このことが私たちの目指す「二つとない街づくり」の指標と考えて、その先を創造せずにはおられません。

## 浜町の街づくりのこれまで

失われつつあった伝統的集落や町並みの保存と景観維持を図るという文化的側面だけでなく、同時に地域の活性化を考える中で私たちは実践的専門家集団として伝統的建造物・歴史的町並みの保存・活用に関する調査研究、啓発、修理・修景工事の相談、技術研修など様々な活動・提言や個々の修理修景の実際を地域住民とともに行ってきました。



町並みスケッチ大会



酒蔵ツーリズム（花と酒まつり）

## この25年でできたこと

近年、地元日本酒が世界的に評価されたのをきっかけに昭和30年代以降半減した地場酒造業がここ数十年の間に勢いを取り戻しつつあります。また、その後始められた複数の酒造元共同企画による酒蔵ツーリズムは年々盛況となっており春先には市人口の3倍近い約10万人の観光客で賑わい、有名どころの祐徳稲荷神社や地元発祥のガタリンピックと並ぶ県内の有数のイベントへと成長しています。これらは産業のみならず、伝統的地場産業とともにあった景観の再生が訪れる人へ特別な場所、特別な時間としての臨場感を増幅しているものと思われ、時に行きかう人達のほろ酔いの笑顔がこれらを証明しているかのようです。

## 新たな展開へ

ここ数年においては伝統的住まいや店舗として存在した家屋が飲食店やカフェそして宿泊施設へと変容している現状があります。これまで所謂、観光インフラについては充分だったとは言えず、その一つである滞在要素が形となり始めています。しかも、旅館においては酒造元などが運営する高級志向のものが多く出現し、そこには当地区を付加価値の高い地域へと変貌させようとする意志が存在しているようです。先に述べたように当地区には建築的に見ても様々な空間形式が混在しており、この要素こそがこれからの時代の人々に「伝統 +」をイメージさせる魅力を持った街に派生する可能性を秘めています。その中であって。鹿島市が観光戦略として提唱する・DMO設立・ニューツーリズム



観光列車



国際交流（佐賀大学）

ムの推進・民泊等の受け入れ施設・日本酒で乾杯条例・観光DXの推進・SNSやHP、アプリなどを活用した情報発信・デスティネーション（目的地化）などと連携しながら官民一体となった街づくりを推進したいと考えます。

## これからのこと（繋ぐことの創造）

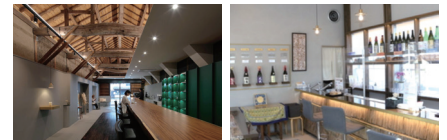
これまでの約25年の私たちの街づくり活動は、紆余曲折を伴いながらも途絶えることなく続いてきました。その中で時代は変化し、元来の酒造業もグローバルな時代に反応して日本文化の一つとして海外での評価も高くなっています。

八宿地区はそれらを生産する場所として、また茅葺民家が多く残る庄金地区においては漁師町の現風景として多様な生活様式を残した街並みはその魅力を世界の人に向けて発信する時が来ています。一方で今後を考えるとき、見据えたテーマはあっても、それらを継続するための職人や技術者は私たちを含めて高齢化や少子化によって減少の一途にあります。私たちはこれからの保存の街づくりはその持続性を如何に創造するかの問題として捉え、人材の継承と育成に加え、地域内外の支える側の人も注目し、参画したくなる魅力ある地域創造を提示することが重要だと考えます。社会学者のシャロン・ズキン曰く「オーセンティシティとは、今日ここに存在するものが 明日も続いていくという希望である」との気持ちをもって。



居住体験

民宿

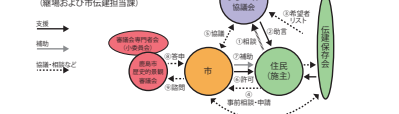


オーベルジュ

浜バー：浜駅内

### (2) 町並み保存に関する住民・組織関係図

窓口：肥前浜宿まちづくり協議会（鹿島市より市役所設置済）



### 街づくり関係図

#### ばば・たいぞう

一級建築士、佐賀県建築士会鹿島地区会熊本大学建築専攻卒業後、宮城県、佐賀県の設計事務所勤務を経て現在、地元鹿島市にて、草設計事務所代表として設計に従事する傍ら地域持続のためのまちづくりに参画し、足掛け30年にわたり活動している。

鹿島市景観審議会委員、鹿島市文化財審議会委員長

# まちづくり奨励賞

事業名 三世代で続けるまちづくり

— 黒石「こみせ通り」の保存と創造的継承 —

受賞団体 青森県建築士会南黒支部 みらいのまちづくり委員会

活動地域 青森県黒石市

賞 正明 | 有限会社 寛建築設計事務所 代表取締役/青森県建築士会 常務理事/統括設計専攻建築士



## はじめに：一級建築士試験に出題された「こみせ」

青森県黒石市に残る「こみせ」は、建物前面に設けられた木造の軒下アーケード空間であり、積雪寒冷地における生活と商いを支えてきた雪国特有の街路空間である。雪や雨、夏の日差しを避けながら歩くことができるこの空間は、建築の付属物ではなく、通行・滞留・交流といった多様な行為を受け止める半公共空間として機能してきた。地域住民の日常生活と密接に結びつきながら、江戸時代から現在まで連続と受け継がれてきた点に、この街路形式の本質的な価値がある。

2020年の一級建築士学科試験において、この「こみせ」が試験問題として出題された。問題文では、「青森県黒石市では、中町の『こみせ』と呼ばれる、降雨や日差しを避けて通行できる木造の軒下歩廊が連続する街並みを、伝統的建造物群保存地区に指定し、保存に取り組んでいる」と記され、これが正解肢として扱われた。



写真1 1990年5月31日 津軽新報

一級建築士試験において、地域固有の街路空間である「こみせ」が制度的・専門的価値を持つものとして明確に位置づけられたことは、私にとって、また1997年以降「こみせ」を活かしたまちづくりに継続して取り組んできた地元建築士会にとっても、象徴的な出来事であった。

建築士の試験に出題されたことは、これまで地域で積み重ねてきた実践が、専門的視点から評価された結果であると受け止めている。

## 第一世代：市民主体による保存運動の始まり

私の家族とこみせ通りとの関わりは、1990年に始まる。当時、こみせ通り沿いの一角にマンション建設計画が持ち上がった。計画が進めば、こみせが連続する歴史的街並みは分断され、地域が長年育んできた景観と文化が大きく損なわれることが懸念された。

この危機に対し、私の父を中心とする市民有志が立ち上がり、「こみせの会」を結成した。行政や事業者に委ねるのではなく、市民自らが建設予定地（旧布団店）を買取り、マンション建設そのものを中止へと導いた点に、この運動の大きな特徴がある。この行動は、市民が主体となって景観を守り得ることを示し、「自分たちのまちは自分たちで守る」という意識を地域に根付かせた。（写真1）

建設予定地は1994年に「こみせ駅」として再生され、現在もこみせ通りの観光拠点として活用されている。保存にとどまらず、新たな用途を与え、使い続けることで街に開かれた存在としたことは、歴史的建築物の保存活用における重要な示唆を含んでいる。これが第一世代である父の世代によるまちづくりである。

## 第二世代：建築士としての実践と協働の広がり

1993年、父が黒石市の収入役に就任したことを契機に、私は東京から地元へ戻り、一級建築士として家業である金物店・建築資材店を継いだ。ここから、地域に根ざした建築士として、また建築士会会員としての自身のまちづくりが始まった。

1997年以降、建築士会の活動を通じて、こみせ通りを軸とした調査、提案、社会実験、教育活動など、多岐にわたる取り組みに関わってきた。中でも「こみせ活用ワークショップ」は、保存中心であった活動を、商店会、行政、学生、市民など多様な主体が関わる協働型のまちづくりへと発展させる契機となった。

建築士が専門知を一方向的に示すのではなく、地域住民と対話を重ねながら合意形成を図り、実践につなげていく姿勢は、地方都市における持続可能なまちづくりの一つのモデルである。

## 教育と次世代育成を通じたまちづくり

将来のまちづくりを担う人材育成も重要なテーマとして位置づけ、子どもたちへのまちづくり教育に力を注いだ。12年間継続して実施した「小学生まちづくりデザインコンテスト」では、子どもたちが自分たちの街を見つめ直し、未来を主体的に考える機会を創出した。

2005年には「家族で考える 私の街のゴミステーションコンテスト」において、金賞作品をこみせ通りで実現することができた。教育と実践が結びつき、まちづくりが身近なものとして共有された象徴的な成果であった。（写真2）



写真2 2005年5月24日 ゴミステーション完成記念式典：こみせ通りに設置した



写真3 2010年8月21日 こみせサロン「松の湯」オープニングセレモニー：小学生から市長まで市民20名でテープカット

## 空き家再生と 地元教育機関との連携

2010年には、旧松の湯を活用した空き家再生の社会実験を実施し、市民参加型の取り組みとして検証を重ねた。その成果を踏まえ、2015年には「松の湯交流館」として本格的な再生が実現している。(写真3、4)

さらに2017年からは3か年で、高校2校および弘前大学と連携し、「まち歩きユニバーサルデザインプロジェクト」に取り組んだ。高齢者や障害者、外国人観光客など多様な利用者に配慮し、多言語対応サインの提案など、景観と利便性の両立を目指した。

## 第三世代へ：継承と新たな展開

近年では、文系大学を卒業後に建築士を志した息子が一級建築士として活動に加わり、三世代によるまちづくりが新たな段階を迎えている。黒石市元町の旧佐藤酒造店(はつこま)では、歴史的建物の保存に携わりながら、放課後等デイサービス事業を展開し、その収益を建物保存に充てる循環型の仕組みづくりに挑戦している。社会的課題への対応と建物保存を両立させる試みは、次



写真5 2025年9月撮影：黒石市で一番間口の長い51mのこみせ はつこま

世代ならではの新しい実践である。(写真5)

## おわりに：若手建築士への呼びかけ

父の世代が市民主体による保存のきっかけをつくり、私の世代が建築士として協働と実践を広げ、次の世代が新たな社会的役割と結びつけながら未来へとつないでいく。黒石「こみせ通り」で続いてきたまちづくりは、三世代にわたる時間の積み重ねによって形づくられてきた。(写真6)

この歩みを通して、特に若い建築士に伝えたいのは、建築士会活動が地域と専門職をつなぐ重要な入り口であるということである。建築士会は、設計実務だけでは得られない視点や出会いをもち、市民や行政と



写真4 2011年2月3日 市民へ向けて活動報告(新聞カラー1面)



写真6 左から箕正嘉(88歳)、箕正明(60歳)、箕聡史(29歳):2025年9月こみせ通りにて撮影

協働する経験を積む場となる。小さな関わりであっても、それがやがて地域の信頼となり、建築士としての軸を形づくっていく。

一級建築士試験に「こみせ」が出題されたことは、地域に根ざしたまちづくりが、建築士の公共的役割として正当に評価される時代に入ったことを示している。若手建築士の皆さんには、自らの地域に目を向け、建築士会活動を通じて、まちとともに成長する建築士の姿を描いてほしい。黒石での実践が、その第一歩を後押しする事例となれば幸いである。

### かけひ・まさあき

1964年青森県生まれ。日本大学工学部建築学科卒業。有限会社 箕建築設計事務所 代表取締役。青森県建築士会 常務理事。統括設計専攻建築士